

## 不登校生の予後過程と親の変容 －親の会に参加した親の自由記述から－

### Prognosis of School Non-attendance Children and Transformation of Their Parents －From the Free Descriptions of Their Participants Parents' group－

南 雅 則

#### 要旨

本研究は、不登校の親の会に参加した保護者18名（家族）から得た自由記述をもとに、親の会が不登校生の予後過程に及ぼした影響について検討したものである。分析にあたっては、テキストマイニングソフトKH Coder（樋口，2014）を使用した。階層クラスター分析（ウォード法）を行った結果、8クラスターが抽出され、親の働きかけと子どもの変化との関係が明らかとなった。また、親のあきらめや価値観の転換が不登校生の予後と関係しており、親への心理的な支援の重要性が示唆された。

キーワード：不登校（school non-attendance）／親の会（parents' group）／  
テキストマイニング（text mining）

#### I 問題と目的

子どもが不登校になり、そして回復する過程には様々な要因が複合的に絡み合い、作用している（渡邊・夏野・古川・佐藤・濱名・辻河，1998）と考えられており、中でも佐藤・濱名・浅川（2011）が、「親の働きかけが変われば子どもも回復過程をたどる」と指摘しているように、親の支援をどのように行うのかということが重要になっている。不登校の親に対する支援のひとつとして、親を対象としたサポートグループ（親グループ、親の会などともいう）<sup>(註1)</sup>があるが、これは「親への援助によって親子関係の改善、ひいては子どもの成長と問題の解消を目指すもの（小野，2000）」である。不登校の親グループの支援に関わった中地（2011）によれば、「不登校生の理解や援助は、その家族の存在を抜きにして考えることは難しく、家族も支援を必要としていることが多い」ことが指摘されており、親グループの果たす役割は大き

なものがあるといえる。

中地（2012）は、日本における不登校生の親グループについての文献展望を行った結果、親の会に親が参加することで、夫婦関係や親子関係にも肯定的な変化を及ぼすという特徴を見出している。小野（2000）は、親グループの持つ働きについて、心理的安定の要因として①孤立的な不幸感からの解放②自由で安全な雰囲気③受容④共感と理解⑤カタルシス⑥将来の展望－希望の6つを、また安定から変化の要因として①対人関係の学習②他のメンバーを通しての自己理解③他のメンバーの洞察などからの学習の3つを、そして変化のための要因として①理解の変化への刺激②行動の変化への刺激③価値観の転換の見本の3つを、さらにその他の要因として①情報・ガイダンスの計13の要因を示している。つまり、親の会に参加することによって親の心理的安定がもたらされ、それに伴う親自身の変化が親子関係を再構築することとなり、子どもの社会復帰が期待できるようになると考えられる。しかし、中地（2012）が指摘しているように、親の会に参加した効果の特徴や規準の明確

MINAMI, Masanori

北陸学院大学短期大学部 食物栄養学科  
主要担当科目 教育相談、発達心理学

化がなされているとは言えず、どのような要因による効果なのかが明らかにされていなかった。

館・佐藤・浅川・南(2014)は、近畿地方の一地方都市で20年以上にわたって続いている親の会に参加した親へ実施した質問紙調査の自由記述の分析の結果、親の働きかけを変えるためには、その親に共感的な理解を示す周囲の人の影響が関係していることを明らかにしている。館他(2014)によれば、親の働きかけが変わったことによって子どもは回復過程をたどったことが示されたが、子どもの回復段階の変化する過程とその親の働きかけとの関係、親の働きかけと回復までの子どもの変化に対する予後過程について明らかにはされていなかった。

そこで、本研究では親の自由記述をもとに、子どもの回復過程と親の働きかけとの関係、その過程で親の会が親の変容に及ぼした影響(効果)について実証的に検討し、これまでに示されてきた不登校生やその親に対する支援のあり方に資することを目的とした。本研究は、特徴的な個別の事例を取り上げて検討する事例検討とは異なり、一定数の親からの自由記述をもとにテキストマイニングにより検討したものである。本研究では、自由記述の分析にあたり、テキストマイニングソフトKH Coder(樋口, 2014)を使用した。テキストマイニングを用いる意義として、テキストデータを計量的かつ客観的に検討できることがあげられる。調査票の自由記述のようなテキストデータが大量にある場合、人手による記述内容の分類だけでは、見落としや主観による偏りが問題となるが、テキストマイニングを用いることで、主観的要素をできるかぎり排除してテキストデータのような質的データの検討が可能である(樋口, 2014)。つまり、親の会に参加した親たちの自由記述の内容をテキストマイニングで計量的に分析することによって、親の働きかけと回復までの子どもの変化に対する予後過程を客観的に捉えることができると考えられたためである。

## II 方法

1. 研究協力者および時期 A県B市で2013年3月まで実施されて親の会に複数回参加したことのある保護者23名(家族)に対し、同年4月に文書

と電話で調査協力の依頼を行った。調査内容は、子どもの家庭での様子と支援、学校の協力と支援、専門家からの支援、子どものキャリアと進路のそれぞれについて、自由記述で回答を求めた。最終的に同年9月末までに18名(家族)から回答があったものを分析対象とした。

2. 倫理的配慮 研究協力者に対しては、調査依頼の際、調査は研究のためのものであること文書ならびに電話で伝えた。回答は個人情報として厳重に管理し、研究目的以外に使用しないことを確認し、了解を得た。

## III 結果

1. 自由記述の変容段階別分類 はじめに、小野(2000)、佐藤他(2011)および館他(2014)の内容をもとに親の変容段階を整理するための基準を作成した<sup>(注2)</sup>(Table 1)。その後、自由記述の全415文を親の変容段階基準(Table 1)にしたがい、1文ずつ評定を行い分類した。自由記述は研究協力者別に、文意を失わない範囲で整文化された。評定にあたっては著者と大学で臨床心理学を担当し学校教育相談業務にも携わる教員の2名がそれぞれ個別に行った。2名による評定の一致率(カッパ係数)は.73であった。評定が異なったものについては、その後の2名による協議で決定した。その結果、「不安・混乱期」40文、「内閉・模索期」135文、「安定・自己探索期」155文、「自立・社会復帰期」85文に分類された。

2. 抽出語の検討 全ての文を対象にした頻出語の抽出を行ったところ、親の自由記述に見られた“不登校”や“適応教室”などの意味のある語が、“不”と“登校”、“適応”と“教室”のように別の語として抽出されていた。そこで、自由記述中に出現した意味のある語を抽出するために13語を強制抽出語リスト(Table 2)として指定した。また、感動詞、副詞、形容詞(非自立)は抽出の際に除外した。出現回数5回以上の出現語をTable 3に示す。

3. 階層クラスター分析による特徴の検討 さらに全体の特徴を大まかにとらえるため、最小出現数を10、クラスター数をAutoに指定して階層クラスター分析(ウォード法)を行ったところ8クラスターが抽出された。階層クラスター分析によっ

Table 1 親の変容段階とその内容

## 不安・混乱期

2, 3日たてば登校すると思っていたが、なかなか登校しようとしな  
い。  
子どもが欠席する理由がわからず、問いたです。  
子どもは学校に行けない理由を次々にあげ、親はそれに振り回される。  
なんとかして学校に行かそうし、担任や学校への批判・要求が強くなる。  
母親はなぜ自分ばかりが苦勞するのかと父親を責める。  
祖父母が学校に行かない子どもやその親を責める。

## 内閉・模索期

子どもが不登校になった原因探しをする。  
子どもを心療内科に連れて行く。  
子どもの生活が怠けているようで、批判的にしか見えない。  
子どもに対しては操作的、強制的、強迫的に接する。  
子どもと激しく衝突し、登校させることを断念する。  
他者からの助言に対して、不満や抵抗を感じる。

## 安定・自己探索期

親の会などに参加し、具体的な解決方法を探そうとする。  
子どもを理解しようと努め、親自身が学び直しを始める。  
子どもへの口出しや干渉を控え、子の自主性を認める。  
学校・学歴への執着を放棄し、開き直るなど世間体からの解放がみられる。  
生活に落ち着きやゆとりが感じられ、親子関係が安定する。

## 自立・社会復帰期

子どもが学校の話題を嫌がらなくなる。  
親の会などへの参加（の目的）が終了する。  
親の価値観を押しつけず、子どもがやろうとしていることを応援する。

Table 2 強制抽出語リスト

不登校  
愛和会  
適応教室  
専門家  
別室登校  
親の会  
昼夜逆転  
就職活動  
養護教諭  
積極的  
精神的  
大検  
スクールカウンセラー

小野 (2000), 佐藤他 (2011), 館他 (2014) をもとに作成

て分類された語をTable 4 に示す。

以下、それぞれのクラスター内の動詞に注目し、各クラスターの特徴を順に検討する。第1クラスター（以下：CL1と表記、第8クラスターまで同様に表記）では、“行く”と“行ける”の他に、“言う”、“考える”、“頑張る”という動詞が見られた。“行く”と“行ける”について、KWICコンコーダンスで用いられ方をみたところ、“行く”については「学校に行くのが当然」, 「学校に行かない」, 「学校に行っていない」という用いられ方であり、“行ける”については「学校に行けない」, 「学校に行けなくなり」という用いられ方であった。いずれも子どもが学校に行っていない状況についての記述中に現れていた。また、“言う”は、親が周囲から子どものことを言われたとか子どもに何か言ったという文脈で、“考える”は親が子どものことを考えるという文脈で、“頑張る”は不登校になる前や初期の子どもの学校に行こうと

して頑張ったという文脈で多く用いられていた。こうした理由により、このクラスターを「行かないこと」と命名した。

CL2では、“入る”という動詞がみられた。CL1と同様にKWICコンコーダンスで用いられ方をみたところ、「長いトンネルに入ってしまった感じ」, 「(風呂に)二人で入りました」, 「大検塾に入り、一人で」, 「〇〇学園に入ってから」のように用いられ方は異なるが、子どもの様子に変化したことを表す文脈で用いられていた。動詞以外では“勉強”、“卒業”、“中学校”、“高校”など家庭外とのつながりを表す語がみられた。こうした理由により、このクラスターを「動き出すこと」と命名した。

CL3では、“受ける”、“話す”という動詞がみられた。KWICコンコーダンスで用いられ方をみたところ、「診察を受けた」, 「カウンセリングを受けるようになって」, 「支援を受けてみようかと」

Table 3 出現回数が5回以上の出現語(上位144語)

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
親	91	勉強	12	本	7
先生	89	スクールカウンセラー	11	お世話	6
子ども	81	見る	11	はじめ	6
学校	77	行く	11	学園	6
不登校	70	時間	11	起きる	6
行く	61	紹介	11	校長	6
思う	54	中学校	11	思える	6
高校	36	無理	11	時期	6
言う	34	学期	10	辞める	6
本人	34	感じる	10	終わる	6
自分	33	頑張る	10	出かける	6
担任	33	元気	10	心	6
愛和会	31	最初	10	進路	6
子	29	受け入れる	10	祖父母	6
家庭	28	親子	10	大検	6
登校	28	入学	10	大阪	6
話	27	夜	10	探す	6
聞く	26	話す	10	通う	6
卒業	24	結果	9	非常	6
対応	24	心療内科	9	不安	6
参加	23	進学	9	部屋	6
息子	23	前	9	毎日	6
気持ち	22	大切	9	様子	6
支援	22	娘	9	立場	6
受ける	22	問題	9	連れる	6
来る	22	フリースクール	8	アドバイス	5
理解	19	関係	8	サポート	5
状態	18	希望	8	一番	5
生活	18	経験	8	過ごす	5
母親	18	現在	8	気づく	5
カウンセリング	17	仕事	8	休む	5
相談	16	出す	8	作る	5
父親	15	心理	8	持つ	5
自身	14	専門家	8	週	5
当初	14	大変	8	食事	5
入る	14	必要	8	寝る	5
その後	13	両親	8	心配	5
カウンセラー	13	アルバイト	7	生	5
行ける	13	ゲーム	7	積極的	5
今	13	家族	7	接す	5
大学	13	会う	7	多い	5
訪問	13	出る	7	知る	5
一緒	12	親の会	7	中退	5
家	12	精神的	7	昼夜逆転	5
決める	12	続く	7	長い	5
考える	12	電話	7	普通	5
思い	12	病院	7	別室登校	5
適応教室	12	夫婦	7	遊ぶ	5

Table 4 階層クラスター分析により分類された出現回数10回以上の出現語

クラスター	分類された抽出語								
第1クラスター 「行かないこと」	学校 行ける	行く 息子	当初 頑張る	言う 登校	自分 無理	考える	状態	今	
第2クラスター 「動き出すこと」	勉強 学期	入る 高校	父親 卒業	夜	家	中学校	入学		
第3クラスター 「相談に行くこと」	受ける	話す	適応教室	スクールカウンセラー	カウンセリング				
第4クラスター 「決めること」	その後 親子	母親 見る	紹介 生活	最初 一緒	相談 決める	大学 本人	時間 カウンセラー	行う	
第5クラスター 「訪問されること」	家庭	訪問	来る	先生	担任				
第6クラスター 「聞いてもらうこと」	参加	愛和会	話	聞く					
第7クラスター 「理解すること」	気持ち	理解	思う	子ども	親				
第8クラスター 「受け入れること」	思い 子	元気	感じる	支援	受け入れる	自身	対応	不登校	

のように、ほとんどが医療機関や専門機関に相談を受けたという文脈で用いられていた。また、“話す”は子どもが親に話す場面や親が学校の先生に話す場面などでみられ、特徴的な用いられ方はみられなかった。こうした理由により、このクラスターを「相談に行くこと」と命名した。

CL4では、“行う”、“見る”、“決める”という動詞が見られた。KWICコンコーダンスで用いられ方をみたところ、“行う”は「声かけを行い、親子の普通の会話」、「秋に行われる秋祭り」、「就職活動を行い、新聞販売会社」のように用いられていたものの他に「行ってよかった」のように‘いって’と‘おこなって’が混同していたものもみられた。また、“見る”は「様子を見に行く」、「じっくり見ることができた」、「夫婦で見た時」のように、親が子どもの状態を見守っている様子がうかがえた。“決める”は「行かないと決めた子どもへの接し方」、「覚悟を決め、本人によりそい」、「やってみようと思ったこと」、「進路を決めるときには」のような用いられ方から、子どもや親の強い意志や覚悟を感じ取ることができる。こうした理由により、このクラスターを「決めること」と命名した。

CL5では、“来る”という動詞が見られた。KWICコンコーダンスで用いられ方をみたところ、「遊びに来てくれました」、「家に来られ無理にでも」、

「迎えに来てくださったり」のように、家に学校の先生が訪問する場面で多くみられた。先生の家庭訪問は感謝しているがほとんど効果を感じていないことや、むしろ学校や先生が義務感で訪問しているのではないかと感じている記述もみられた。こうした理由により、このクラスターを「訪問されること」と命名した。

CL6では、“聞く”と言う動詞が見られた。KWICコンコーダンスで用いられ方をみたところ、「しんどい思いを聞いてもらったり」、「話を聞いてもらえませんでした」、「気持ちを聞かず、一方的に」のように、親が自分の悩みやしんどさを聞いてもらうとか、子どもの気持ちを聞くという文脈で多く用いられていた。“聞く”は同じクラスター内の“話”や、クラスターには抽出されていないが“愛和会”と強く共起しており、親が親の会などで話を聞いてもらう場面で多く用いられていることがわかる。こうした理由により、このクラスターを「聞いてもらうこと」と命名した。

CL7では、“思う”という動詞が見られた。頻出度は54回と多く、KWICコンコーダンスで用いられ方をみたところ、「△△とと思いました（思います）」や「□□と思っていたので」のように“思う”そのものが特定の意味を持たないため、このクラスターでは名詞であるが“理解”という語に注目した。“理解”についてKWICコンコーダン

スで用いられ方をみたところ、「夫は長い間理解できませんでした」、「子どもの不登校を理解するまでは」、「親の気持ちを理解しよう」とのように、親が子どもの状態をどう理解したのか(するのか)といった文脈で多く用いられていた。こうした理由により、このクラスターを「理解すること」と命名した。

CL8では、“感じる”、“受け入れる”という動詞が見られた。“感じる”についてKWICコンコーダンスで用いられ方をみたところ、「引け目を感じて学校に足を向けるのが」、「鵜呑みにしない方がいいなと感じました」、「共感してもらえたと感じられました」のように、学校などに対してどのような感情を持ったのかという文脈で多く用いられていた。また、“受け入れる”についてKWICコンコーダンスで用いられ方をみたところ、「不登校を受け入れられず」、「そのうち受け入れるしかない」と、「親の気持ちを受け入れてくださる専門家」のように、親が子どもの不登校という現実を無条件で受け入れるという文脈で多く用いられていた。親の「どうして自分の子が不登校に」という思いが、やがて「子どものありのまま全てを受け入れよう」という思いへ移っていく様子をうかがうことができる。こうした理由により、このクラスターを「受け入れること」と命名した。

以上の8つのクラスターを親の変容段階基準(Table 1)に即してとらえるならば、次に示すような子どもと親の姿を読みとることができると考えられる。すなわち、子どもが不登校となり、親は何とか学校に行かせようとするし、子どもも一時的に頑張っただけで登校しようとするが、結局学校に行かなく(行けなく)なる〔CL1:行かないこと〕。そうすると、学校の先生(担任)が家庭訪問に来ることとなるが〔CL5:訪問されること〕、そうした誘いに対しても子どもは応じることがなく、状況に変化は見られない。こうした状況を何とかしたいと親はカウンセリングを受けたり〔CL3:相談に行くこと〕、親の会などに参加するようになる〔CL6:聞いてもらうこと〕。親の会などに参加する中で、親は子どもの気持ちを理解することを学び〔CL7:理解すること〕、子どものありのままを受け入れようと覚悟する〔CL8:受け入れること〕。子どもはそうした親の変化を

感じ取りながら、自分の将来を自分なりに考え〔CL4:決めること〕、自分の意思で進路を見つけようと動き始める〔CL2:動き出すこと〕ことによって、不登校の親としての役割を終えることになる。以上のような階層クラスター分析の結果から、親の働きかけと回復までの子どもの変化に対する予後過程を客観的にとらえることができたのではないと思われる。

4. 親の変容段階を外部変数とする対応分析 次に、差異が顕著な抽出語(最小出現数を5回、上位60語に指定)に対してTable 1に整理された親の変容段階を外部変数とする対応分析を行った。その結果、不安・混乱期には「病院」、「心配」、「担任」などが、また、内閉・模索期には「不登校」、「昼夜逆転」、「受ける」などが、安定・自己探索期には「支援」、「立場」、「思える」などが、そして、自立・社会復帰期には「高校」、「大学」、「アルバイト」などの語がみられた(Figure 1)。

KH Coderにおける対応分析のプロットでは原点付近に近いほど意味を持たない語であるとされ、反対に原点から離れる位置にプロットされる語ほど意味のある語であるとされる。布置された不安・混乱期と内閉・模索期の段階における出現語をみると、“心配”、“休む”、“心療内科”、“担任”、“部屋”、“昼夜逆転”など、子どもが不登校になって閉じこもり親がどう対応すればいいのかを悩んできた様子や、担任が何らかの対応をしてきたことがうかがえる。また、安定・自己探索期の段階では、“支援”、“立場”、“必要”、“元気”などのように、親が子どもの不登校をありのままに受け入れて一緒に支えてきたことがうかがえる。そして、自立・社会復帰期の段階になると、“アルバイト”、“大検”、“大学”のように社会復帰してきた様子を見ることが出来る。

5. 親の変容段階とコーディングルール<sup>(注3)</sup>による集計 最後に、親の変容段階にみられる特徴をとらえるために、全ての文を対象に親の変容段階とコーディングルールによるクロス集計を行った。KH Coderにおけるコーディングルールは、分析者の主観によるところが大きく、どのようなコーディングルールを用いたのかで分析結果が変わる可能性がある。そこで、コーディングルール作成にあたり、「学校に“行かない(行けない)”とい

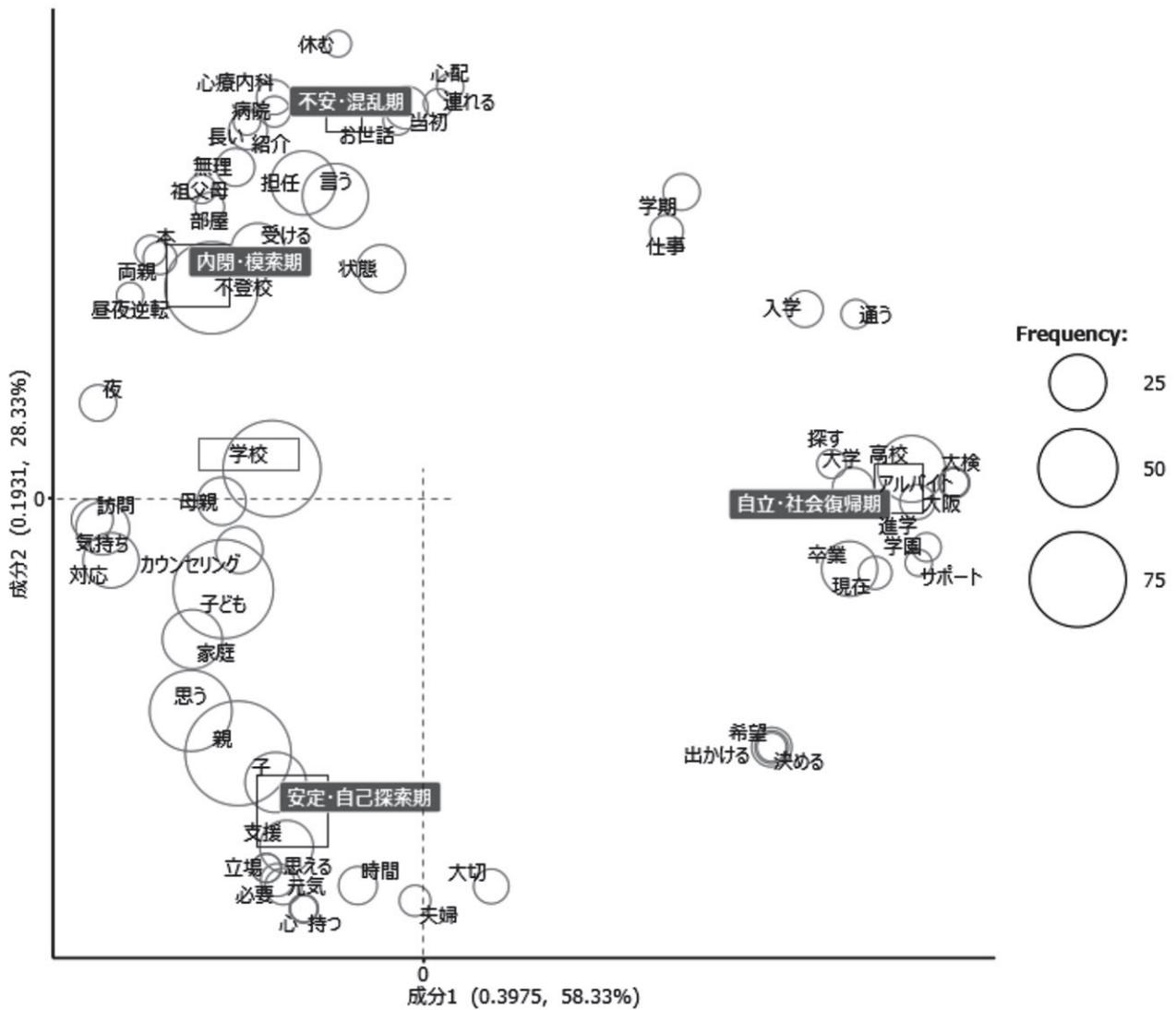


Figure 1 親の変容段階を外部変数とする対応分析の布置図

Table 5 作成されたコーディングルール

\* 親の動揺と不安

‘行ける’ or ‘起きる’ or ‘行かない’ or ‘行かへん’ or ‘行ってへん’ or ‘行ってない’ or ‘行けない’ or ‘行くことはない’ or 無理

\* 親の葛藤とあきらめ

‘聞く’ or ‘聞いてもらう’ or ‘聞き’ or ‘聞いて’ or ‘聞いたり’ or ‘聞くこと’ or ‘聞かせて’ or カウンセリング

\* 親の価値観の転換

‘理解する’ or ‘理解できる’ or ‘理解のある’ or 理解 or ‘決める’ or ‘決めた’ or ‘決めた時’ or ‘決めたこと’ or 一緒 or ‘受け入れる’ or 覚悟

\* 不登校の親役割の終わり

大検 or 仕事 or アルバイト or 高校 or 卒業

Table 6 親の変容段階とコーディングルールによる集計（ケースの度数と割合）

	親の動揺と不安	親の葛藤とあきらめ	親の価値観の転換	親役割の終わり
不安・混乱期	6 (15.00%)	2 (5.00%)	2 (5.00%)	2 (5.00%)
内閉・模索期	8 (5.93%)	15(11.11%)	12 (8.89%)	9 (6.67%)
安定・自己探索期	10 (6.45%)	16(10.32%)	16(10.32%)	9 (5.81%)
自立・社会復帰期	2 (2.35%)	7 (8.24%)	8 (9.41%)	36(42.35%)
合計	26 (6.27%)	40 (9.64%)	38 (9.16%)	56(13.49%)

注：本表における割合とは全自由記述文中に占める度数を表している

う状況があり、親がそうした状況を“聞いて”もらい、子どもの気持ちを尊重しようと“決めた”ときから状況が変化し、やがて“大検”や“アルバイト”など社会復帰に至る」という先の階層クラスター分析や対応分析の結果をもとに「親の動揺と不安」、「親の葛藤とあきらめ」、「親の価値観の転換」、「不登校の親役割の終わり」の4つからなるコーディングルールを作成した（Table 5）。

全ての文を対象に親の変容段階とコーディングルールによる集計の結果はTable 6の通りである。集計結果から10%以上を示したところをみると、「親の動揺と不安」では不登校の初期段階にあたる不安・混乱期（15.00%）、また「親の葛藤とあきらめ」では内閉・模索期（11.00%）と安定・自己探索期（10.32%）、「親の価値観の転換」では安定・自己探索期（10.32%）、「不登校の親役割の終わり」では自立・社会復帰期（42.35%）であった。特にこの中で、「親の葛藤とあきらめ」、「親の価値観の転換」が内閉・模索期と安定・自己探索期で特徴的にみられるが、この時期は親が最も苦しむしんどさや悩みを抱えている段階から子どものありのままを受け入れ落ち着きを取り戻す段階である。親が内閉・模索期から安定・自己探索期への移行をどのように図っていくのか、また移行をどのように支援していくのが非常に重要であることを示唆していると思われる。

#### IV 考察

佐藤他（2011）は、子どもの不登校が解消し社会的に自立していく過程は一連の流れに沿って変化していると述べており、以下に親の変容の流れに沿って整理する。

親は子どもが学校に行かないことによって不安

になり、何とかして行かせようとする。しかし、子どもは抵抗して学校に行くことはなく、親はその原因がよくわからないこともあり混乱状態に陥る。

親が親の会に参加したのは主に内閉・模索期から安定・自己探索期にあたる。この段階は親にとっては、子どもの不登校が先の見えないもののように感じられ、親の会にワラをも掴む思いで参加した親も少なくない。この段階の自由記述からは「自分だけが悩んでいるのではない」、「親の思いや愚痴をまるごと受け止めてもらえた」、「（親の会に）参加するようになり、子どもの気持ちに任せるようになった」、「（不登校を）克服した他の親御さんの話が参考になった」、「（親の会に）参加しはじめてから子どもが安定しだした」など、親の会についての記述がみられ、親の会への参加が回復に向けてのひとつのきっかけになったことがうかがえる。こうした親の変化は「孤立的不幸感からの解放」や「他のメンバーを通しての自己理解」、「価値観の転換の見本」など、小野（2000）が示した親の会の持つ働きによるものであると考えられる。また、佐藤他（2011）が述べているように、親が変わることによって子どもも変わることが明らかにされたといえるだろう。

親の会の果たす役割や効果を考えると、それは親が子どもに期待していた生き方をあきらめ、子ども自身が考える生き方を尊重していこうと考えられるようになることであると思われる。こうした親の価値観の転換によって、館他（2014）が指摘するように「子どもが動くまで待つ」などの子どもの行動に合わせた親の行動や、自立・社会復帰期における学校や進路に関する情報の提供、進路に関する話のきっかけを持つ等の親が誘導的に

行う働きかけが有効に作用したのだと考えられる。

## V 今後の課題

本研究では、親の自由記述から、予後過程とそれに伴う親の変容をテキストマイニングの手法を用いて分析し、不登校の子どもと親の関係を、主として親の立場から各段階別にとらえることができた。不登校の回復においては、親の関わりが子どもの経過段階に見られる特徴に違いがあるのと同様に、親の子どもに対する関わりや感情にも違いが見られ、そうした子どもと親の変容を通して自立・社会復帰に至ることが示唆されたと言えよう。しかし、本研究で分析対象となった自由記述は、ある一地域の親の会の参加者によるものであり、本研究の結果を一般化するためには複数の親の会の参加者による自由記述を検討していく必要がある。また、今後テキストマイニングによる自由記述の分析が増えることにより、親の変容や親の会の効果についての知見の蓄積が期待される。

最後に、2016年12月に成立（2017年2月から完全施行）した「義務教育の段階における普通教育に相当する教育の機会の確保等に関する法律」（いわゆる「教育機会確保法」）によって、これまでの学校復帰を前提としていた従来の不登校対策が大きく変わることとなった。法律の内容及び関係機関の取り組みについての議論は他に譲るが、こうした不登校生を取り巻く状況の変化によって親がどのような影響を受けることになるのか、今後の経過を注意深く見守り、検証していく必要があると思われる。

## 〈引用文献〉

- 樋口耕一 2014 社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して— ナカニシヤ出版
- 中地展生 2011 不登校児の親グループに参加した母親からみた家族システムの変化に関する実証的研究 心理臨床学研究 **29** (3), 281–292.
- 中地展生 2012 日本における不登校児の親グループ研究の文献展望—1990～2010年を対象に— カウンセリング研究 **45** (4), 239–247.
- 小野修 2000 ファシリテーターのためのマニュアル 子どもとともに成長する不登校児の「親グループ」黎明書房

佐藤修策・濱名昭子・浅川潔司 2011 親と教師がむきあう不登校 子どもとともに歩む親の会からのメッセージ あいり出版

館沙央理・佐藤修策・浅川潔司・南雅則 2014 登校拒否の児童生徒に対するカウンセリングが彼らの回復過程に与える影響に関する学校心理学的研究 発達心理臨床研究 **20**, 69–77.

渡邊淳一・夏野良司・古川雅文・佐藤修策・濱名昭子・辻河昌登 1998 不登校の予後の規定要因—オープンシステムの親の会における調査を通して— 生徒指導研究 **9**, 58–68.

## 〈注〉

- (1) 本研究では、親を対象としたサポートグループ（親グループ、親の会など）を“親の会”という表現で統一した。
- (2) プロセスモデルではなく、段階別による特徴の整理にとどめた。
- (3) コーディングルールとは、コードを与える際の基準であり、複数の条件（AND, ORなど）の組み合わせが可能である（樋口, 2014）。例えばTable 5の「親の動揺と不安」というコードは‘行ける’, ‘起きる’（以下略）などの抽出語のいずれかに対して与えられていることを示している。

